

マンガ・アニメ造形ビジネス学科設立事業セミナー  
第 8 回  
“ マンガリテラシー論 ”

会場：日本財団大会議室

日時：9月9日(火) 13:00~16:30

講師：養老孟司氏（解剖学者）

牧野圭一氏（京都精華大学教授）

## はじめに

東京財団はマンガ・アニメの底力に着目し世の中のために活かす様々な事業を継続しています。創造力や独立精神の豊かな新しい人材を発掘、育成することは個人や社会の将来に大事なことからです。21世紀はあらゆる分野において感性、情熱、魂といった人間力がとても大きな力となります。高等教育の現場にマンガ・アニメの創造力を採り入れて豊かな人間力をもった優秀な人材を発掘したいと願っております。本年度は、「マンガ・アニメ造形ビジネス学科」を設置しようという提案です。

大学等高等教育機関の経営者の方々に日本のマンガ・アニメの持つ底力をご理解いただきたいと思います。マンガ・アニメに対する世界からの評価や期待、次世代の若者のニーズをしっかりと掴んでいただきます。個性とバリエーションのある「マンガ・アニメ造形ビジネス学科」の設置に向けてセミナーを6月10日より11回開催いたします。

具体的には、マンガ・アニメ学科を設立する為に、マーケティング戦略・新産業構造・海外戦略(比較)・教育論・学生入学促進案などをテーマに、魅力ある学園づくりのヒントとコンテンツを提供する日本で最初の試みです。

東京財団の過去の成果を見てください。昨年はマンガ・アニメ寄付講座を早稲田大学([www.tkfd.or.jp](http://www.tkfd.or.jp))で実施しました。米国UCLAでもマンガ・アニメ講座を開きます。今回は第一級プロフェッショナルを揃え、自信をもってマンガ・アニメに関する世界最高のセミナーをご提供いたします。参加者のご納得していただけるセミナーの開催と自負しております。

本報告書は、第8回(2003年9月9日)の同セミナーをまとめたものです。本書は、本セミナーの内容を関係各位に報告するとともに、参加できなかった方などより多くの方々に内容を共有していただくために作成したものです。魅力ある学校作りのテキストとしてご活用いただければ幸いです。

東京財団会長 日下公人

## 目 次

- セミナー全体スケジュール -	P3 ~ P4
- セミナー風景 -	P5
- 第8回セミナー内容 -	P6 ~ P22
マンガとはルビのある漢字	P 6
日本語とマンガ	P 7
ドラえもんの瞳が笑う	P 10
マンガ・・・「うそ」の魅力	P 11
マンガ・・・誇張的真實	P 14
質疑応答	P 22



講義中の養老孟司氏



講義中の牧野圭一氏

## 第8回「マンガリテラシー論」

講師：養老孟司氏（解剖学者）  
牧野圭一氏（京都精華大学教授）

### マンガとはルビのある漢字

牧野 私たちマンガ家は、マンガというのはこういうものではないか、マンガのおもしろさはどこにあるのかと議論しても、理屈ではなかなかいいところまでたどり着けないもどかしさを感じていました。私はそれを探しに京都まで行って、マンガ学科、マンガ文化研究所、さらにマンガ学会というような場をつくって、マンガ好きもしくはマンガに関心の高い研究者の意見を聞こうという努力をしているのですが、作家が普段から感じているものに明確な言葉でマンガとはこうだと言ってくれる方は多くありません。

しかし、養老先生のご著書を拝見して一つ言葉に行き当たりました。「マンガとはルビのある漢字」だと言いついておられる。しかも、それを日本人の失読症、脳の漢字を読む部位と仮名を読む部位は違ふところから説き起こして下さいます、非常にわかりやすい。だから、日本の国語教育をやっていると、マンガの読解力が進むというのです。

これは先生のご研究のなかでは、初めはどれぐらいのウエートを持っていたのですか。

養老 私は今でも、言葉とは何かということを考えていますが、最初はそこから入りました。言葉の研究をする人は言葉のなかに入ってってしまうものですが、極端な話、言葉とは何だと言っているのが言葉ですから、言葉を外から見るとするのは結構面倒なのです。そこで私は、仮に脳という場を設定して、そのなかで言葉はどうなっているのかという考え方をすることにしました。

すると、現代人の使っている言葉というのは、耳と目を両方使っている。つまり、おしゃべりを聞いても日本語だし、文字を読んでも日本語だとわかった。我々はそのなかで育っていますから、両方とも当たり前だと思っているわけですが、目で見たとものと耳で聞いたものがまったく同じになるものがほかにあるかと考えると、そんなものはないんですね。

だいたい、目で見たとものと耳で聞いたものが同じになるものはあるか、という質問自体が理解できない人が多いのではないかと思います。

例えば、ミンミンゼミはミンミンと鳴いていて、羽根が透き通って体が緑色をしている、アブラゼミはジージーと鳴いていて、体は黒くて羽根が茶色です。しかし、羽根が茶色で体が黒いこととジージーと鳴くことの間には何の関係もないし、緑色で透き通った羽根をしていることとミンミンと鳴くことの間には何の関係もない。ですから、もし、ミンミンゼミがジージーと鳴いて、アブラゼミがミンミンと鳴いても誰も困らない。そうすると、実際の世界で起こっていることと、目と耳は一切関係ないのです。

ここで皆さんが目をつぶると、この部屋は突然消えてしまいます。温度は感じますし、音は聞こえますから、私に変な声で何かを言っているのと何か機械の音が少ししているという世界に突然変わってしまうわけです。目をつぶっても我々はここを同じ部屋だと思えますが、しかし耳で聞こえている部屋は、いま説明したとおりの部屋で、実はそれは目で見たと部屋とは何の関係もないのです。

目と耳は本来関係がない。目で見てもわからないことを耳でとっているし、耳で聞いてもわからないことを目でとっているわけですから当たり前の話です。ところが、言葉の世界では、目で見たとものと耳で聞いたものが同じです。「耳」という字を読んでも、「みみ」という音を聞いても同じ「耳」です。

牧野 先生は、セミの話とともに、よく「重」という字の話がされますね。

養老 中国語では、「重」には音声が一つしか当てられていない。いくつもの方言はありますが、どの方言でも読み方は一つしかないはずで。西洋語は皆そうですが、アルファベットで書かれている「DOG」は「ドッグ」と読むと決まっているわけで、「D」という字は「ディー」だけれど場合によっては「ピー」にもなるということは絶対ないわけです。日本語だけが、そういうめっちゃくちゃなことをやっているわけです。

もし、コンピュータに画像認識させて、その認識の結果音を出す装置を設計したとすると、「重」という字を音声に変換するには、出力側に「じゅう」「ちょう」「おも」「かさ」「え」といった読みを全部入れなければいけない。アルファベットを見て音声に変換する装置なら、出力のほうは1種類でいい。「DOG」は、とにかく「ドッグ」です。

一つのワードに対して1音当てる言語と、日本語のように多重の音を当てる言語では、当然ソフトを取り換えなければいけないことは、どなたもおわかりになると思います。これは、我々の脳でいうならば、脳のなかの別な場所を使わざるをえないということです。

世界の多くの言語では普通、ある単語に対する音声は一つだけ当てていますが、これは日本語でも仮名がそうです。「か」という字を書いたら「か」としか読まないのであって、それを「さ」とか「て」と読んだらルール違反です。

そうすると、日本語には仮名があって多重読みする漢字もあるので、脳のなかのソフトは、仮名を読む場合と漢字を読む場合では分けざるをえない。それが現に皆さんの脳で起こっていることでして、漢字を読んでいるときと仮名を読んでいるときでは、脳は別の場所を使っているのです。

というのも、脳が故障を起こしたときに、漢字が読めなくなるか仮名が読めなくなるかのどちらかになるので、別の場所が壊れたんだということがわかるわけです。両方壊れることがあるだろうとお考えになると思いますが、仮名を読むのは角回という場所ですが、漢字を読む場所とは比較的離れていますので、一緒に壊れることは少ないんです。両方一緒に壊れる場合は脳が大きく壊れたということで、そういう人はそもそも字を読むどころではないという状態になります。

## 日本語とマンガ

牧野 つまり、日本人以外であれば1ヶ所で済むのに、日本人は2ヶ所動かさなければならぬ。

養老 仮名を読むのは角回という場所ですが、ここが壊れた場合、外国人は文字が一切読めない状態になりますが、日本人は仮名は読めないが漢字は読める状態になります。漢字を読む場所が壊れると、日本人は漢字は読めないが仮名は読める状態になります。漢字が読めないのは幼稚園児に逆戻りですが、漢字だけ読めて仮名が読めなくても、新聞の見出しを見てほしい意味はわかるわけです。

ちょっと脳について講義をしましょう。言語関係の場所は大脳皮質の左側面にあります。脳は左右対象形ですが、人間では言語を扱う部分が大きくなっていますから、左右に差があります。脳のしわで一番深いものが中心溝と呼ばれ、大雑把に言えば中心溝より前が前頭葉といわれる部分ですが、中心溝からは運動、中心溝からは知覚をつかさどります。コンピュータだとすれば、後ろが入力関係で、前が出力関係です。

例えば、眼から入った情報はまず、一次視覚領に入ります。そこから隣に順繰りに複製しながら処理していきます。目に映った像を全部、何回も複製していくんです。そうやって複製することによって「見る」ことができます。耳に入った情報は、一次聴覚領に上がってきて、視覚の場合と同じように処理されていきます。

中心溝のすぐ後ろのところへ触覚が入ってきます。ここには体の知覚が、顔はこのへん、つま先はこのへんというように、場所が決まって割り付けられています。しかも、実際の体とは逆さに足が上で、一番下が舌やのどになります。中心溝をはさんで反対側には、運

動の割り付けがあります。

割り付けられた部分の大きさは、対応する体の部分の神経の密度によって変わります。小さいところにたくさん神経がっていると、脳のなかでその領域は広くなります。ですから、唇の範囲は広いですが、背中の中の範囲はその半以下しかない。それぞれの範囲の比率に合わせて人間の体を描いたのが、ペンフィールドのホムンクルスといわれるものです。それは現実の体とはプロポーションがまったく違ってしまいます。神経が細かくたくさん入っている手先、指先は非常に大きくなります。

視覚、聴覚、触覚等の情報は全部集約されて、前頭葉の前頭前野に入り、ここで折り返します。そして、中心溝の前の部分に向かって処理が進んでいき、体のさまざまな部分に振り分けられ、脊髄なり延髄なりへ出ていって運動が生じます。つまり、五感から入ったものを計算して、その計算の結果を運動として出していくのが脳です。そして、この知覚の折り返し点である前頭前野が、いわゆる意識があるところです。

牧野　それで、日本語教育をしっかりやると、仮名を読むところと漢字を読むところの両方が働くようになり、それがマンガの読解力につながるというのですが、マンガの絵が漢字、吹き出しのなかの文字がルビと思ってよいわけですね。ルビに漢字が入っていて、それにまた仮名が振ってあるというような、入れ子型の構造のものもあります。

養老　高橋留美子の「うる星やつら」に、錯乱坊という坊さんが出てくるんですが、「チェリー」とルビがある。さくらんぼうですから、チェリーなんです。それが怒鳴っている吹き出しのなかに「揚豚」と書いてあって「カツ」と振っている。揚豚つまりフライドポークだから、カツです。坊さんが「喝！」と言っているわけです。これは、意味を持った図形があって、それに音声を振っていることでジョークになっている。高橋留美子は、マンガというのはこれだということを知って描いているんですよ。

そうすると、皆さんは文字と絵はどこが違うんだ、ということをしぐお考えになるでしょう。漢字の「山」をご覧いただければすぐわかります。もともとは山の絵だったものが、時代が経つと山という字に変わったことは、多少漢字のことを知っている人ならば誰でも知っています。しかし、なぜ象形文字が山という漢字になるのかという説明は、聞いたことがないんです。

魚という字は、象形文字なら幼稚園児にだって説明するのが楽ではないですか。それでなぜ、いけないのでしょうか。漢字の変化を見てみると、元のものからわからないように変わっていますね。どうしてかというのは、結構ややこしい問題です。先ほど、言葉は音声と視覚が一致するものだと言いました。つまり、目で見ても、耳で聞いても同じだということです。漢字が変わっていくのは、そのことに根本的な理由があるんです。

実は魚の象形文字には、欠点があります。「魚」を音声で言うと「さかな」ですが、象形文字の魚に当たる音声は何でしょう。猫だったら「ニャーニャー」、犬だったら「ワンワン」ですが、魚は仕方ないから「バシャン」とします。魚がはねる音で、具体性を持っているわけです。具体的になればなるほど幼児語になり、大人は「ワンワン」「ニャーニャー」とは言いません。

ところが、魚がはねる水の音を理解するのは耳なんです。目はこんなことは理解しません。象形文字の魚は目でなければわからない。そうすると、漢字が変わるのは言葉の進化なんです。なぜかという、言語というのは目と耳に共通の情報処理だからです。情報処理という観点からいうと、視覚系から情報処理をしていっても、聴覚系から情報処理をしていっても、最終的な結果が同じになるシステムを言葉というんです。脳のなかで視覚系から順次情報処理をしていく、聴覚系から順次情報処理をしていく。すると脳はせまいですから両者がどうしてもぶつかる場所があり、そこでは目から来たルールと耳から来たルールに共通のものしか残せないはずなんです。そうやって我々の脳は言葉というものをくり出したわけです。動物が言葉を持っていないのは、視覚系と聴覚系の間が短いから、

言葉を入れるほどの余地がないんです。

牧野 そうすると、「錯乱坊」に「チェリー」という音がついていて、「揚豚」に「カツ」と書いてあるというのは、一枚のマンガを見ながら頭のなかでは非常にすばやく情報が行き交っているというふうに考えてよろしいですね。そういう非常に脳がすばやく情報交換をしているような作業を繰り返していると、国語教育とマンガを読むことは非常に密接につながってきて、そこで「マンガはルビのある漢字である」という結論に到達するわけですね。

養老 そのことからもう一つ予想できるのは、日本語の読みは非常に能率がいいだろうということなんです。普通、外国語を読む人は脳のせまい所を集中して使っていますが、日本語を読む人はかなり広く使っていることになります。逆に言うと、日本語読みは脳の負担になっているはずですよ。

ロシア語の同時通訳をされている米原万里さんのエッセイが面白かったです。同時通訳は、ロシア語あるいは日本語の文書を渡されて、そのまま日本語あるいはロシア語で読むという作業もします。彼女は自分なりのモノサシを置いて、日本語をロシア語にするのとロシア語を日本語にするのと比べて、日本語を読んでロシア語にするほうが7、8倍速いと書いています。これは米原さんが日本人だからとは思いません。日本語の特性で、非常に速く読めるので、それを音声に変換するのが楽なんです。ロシア語は、読む時間がかかるから、全体として7、8倍時間がかかる。

日本語をもっと速く読めるようにしたのが、たぶんマンガだと私は思っているのです。

その代わり、ちょっと異質の情報が入っている。シンボルとアイコンという概念を説明します。シンボルは文字です。アイコンはマンガです。厳密に定義すると、もとのものの性質を一つでも残した記号をアイコンというんです。

牧野 私は先生の定義に遭遇する前に、私なりにマンガとは何かと思ったのですが、日という文字の変化で丸に点を打ったような単純なものは、パピルスとか粘土板とか木簡とかいう非常に不自由な素材に書くので、単純にせざるをえなかったのではないかと。本当はアイコンのようにいきたいのだけれど、能率を上げようともっと単純になっていく。それが紙ができて印刷技術が発達すると、マンガのようなものが生まれてくる。だから、マンガは饒舌な象形文字という言い方を私はするんですが。

養老 それから日本語がおもしろいのは、擬音語だけは徹底的に残しているんですね。「つらつら」とか「しみじみ」なんていうのはよくわからないけれど、日本語はそういう音をもつごく多用します。それも一種の擬音語に近いものです。

牧野 マンガはそれをどんどん画面に書き込んでしまいますね。「シーン」という、本来はない音まで音として書いてしまう。この表現はない、という表現はないですね。あらゆるものを入れ込んでしまう。美的完成度などは犠牲にしても、わからせることを先にしていく。

ところで、私は読売新聞で長く政治マンガを描いていたのですが、関東一円の読者を対象にマンガを募集しました。担当記者から「リサイクル」という題を提示されたときに、これは幅が広すぎるので、思い付きで「タコのリサイクル」としたんです。「そんなの描けませんよ」と言われたんですが、実際はいろいろなマンガが寄せられました。

タコがムシャムシャ自分を食べてしまって壺のようになったところに、別のタコが入ってきてリサイクルするなんていうのは、マンガ家としてはオーソドックスな発想ですし、タコを凧にしてみたり、宇宙人にしてみたりするのは、マンガの方程式どおりです。こうしたいたい想像できるもの以外に、まったく想像もしなかったものがたくさん出てきま



した。

「タコのリサイクル」という音をそのままとって、「タコ乗りサイクル」というのがずいぶん来ました。タコの形も、サイクルの形も、乗り方も違いますが、意外にたくさんあったんですね。さらに「タコ乗りサイ来る」となると、サイがタコに乗っているんですね。逆にタコがサイに乗っているのもあるんです。おもしろいと思うのは、タコに乗ったサイが来るという状況を絵にできるということです。タコにサイが乗っている。サイはサイらしく、タコはタコらしく、しかもタコが非常にまいているのも描けるところがおもしろい。

これは、「タコのリサイクル」をルビとして、絵のほうは漢字の役目をしていると考えても間違いではないかと。

養老 ひょっとすると、ワープロの漢字変換ができるようになってから、この能力は進んだかもしれないですね。適当な仮名を入れると、とんでもないような字を出してきますから。

牧野 漢字変換でとんでもない文字が出てくるけれども、奇妙に捨てがたい、というような言葉がありますね。

養老 仮名漢字変換というのは、日本語にしかないんですよ。外国人に日本語の説明をしても、音訓読みというものがまったく理解できないんです。典型的な文化摩擦ですよ。

ドラえもんの瞳が笑う

牧野 もう一つ、ドラえもんの瞳が笑うという話があります。ドラえもんが笑うときに瞳がへの字になるのが、マンガの表現としては別に驚かないでしょうが、マンガ研究者の間ではかなり話題になっています。瞳はもともと丸いもので、への字になることはないですね。ドラえもんの黒目が笑っている表現は、解剖学的に言うとまったく間違っているのですが、マンガのなかでは当然として表現されているわけです。

養老 そういうことは、しょっちゅうありそうな気はするのですが、具体的な例をいまいつかないのですが、抽象化していくと「マンガ的」というぐらいですから。

牧野 これは特異な表現とも思えないし、マンガの上ではこういう表現がいくつもあって、何ら不思議がることはない、ということですね。

養老 おそらく不思議だと思っている方は、論理に反するにもかかわらず受け手が笑っているのはどうしてか、と感じるんでしょうね。

牧野 さいたま市が続けているユーモアフォトコンテストには、いろいろなものが顔に見える写真が出てきます。点が3つあると上の2つが目で、下が口だとお考えになることが非常に多くあるのです。

養老 それは我々の認識の特性が関係しています。顔を認識する場所が脳のなかに特別ありまして、そこがやられた方は、誰でも知っている有名な人の顔を見ても、顔だということはわかるのですが、誰の顔かわからなくなる。相貌失認といいます。脳内のその場所は、漢字の認識と近い場所です。顔の認識が我々にとって特別な場所にあるということは、人間は社会生活をする動物で、なかでも顔の認識がきわめて重要な役割を持っているということです。

もう一つおもしろいのは、デスマスクを取るための型がありますね。あの顔の形にくぼんだものの正面から撮った写真を見せると、皆さん絶対にくぼんでいるようには見ないんです。顔だとわかった瞬間に飛び出すんです。本来はへこんでいるのに写真が立体に見えるのは、我々の脳が立体に構成し直しているからです。とくに顔の場合は必ず飛び出した形に構成してしまう。

牧野 マンガの分野のなかで似顔絵というのは、確立された非常に大きな分野です。山藤章二さんはその専門家といってもいいですが、毎週カラーページで特集しているながら続くのは、皆さんがそれくらい飽きずに顔を見るということです。

ところで、少女マンガのキャラクターの顔は目が大きいですね。どう考えても眼球が頭骨からはみ出してしまふ。これは、西洋型の美術教育を受けた方々から見ると許しがたい。ありえないことを当たり前のように描いて喜んでいるなんていうのは、少なくともそれを大学の美術教育に取り入れることはできない、という論法です。

養老 それは怒っている先生が生物学をご存じないんですよ。生物ではスーパーノーマルスティミュラスというのがあります。生き物がスーパーノーマルな刺激に反応するという事です。典型的なのは西洋人の女性のおっぱいです。大きければ大きいほどいい。普通の女性が持っているサイズのおっぱいより、もっと大きいのがいい。それは現実離れしているということですからスーパーノーマルです。逆に言うと、男の知覚系が現実よりもはるかに強いところまで許容度を持っていて、もっと大きくていい、もっと大きくていいと言っている。実際に巨大なおっぱいをつくるためにかかるコストを考えると、あほくさいから実際にはやらないですが、それでもなお受け手の側がそれ以上の感受性を持っているというケースです。そういうことがありうると仮定すると、進化の過程でおっぱいはどんどん大きくなります。大きければ大きいほど、いっそう惹きつけられるからです。

牧野 このへんは、きょうのセミナーのポイントにもなってくるのですが、新しい分野を大学に取り入れたいといったときに、どうしてもいままでやってきたモノサシで計ろうとします。デッサンでは、頭からあごの比率に対して目はこのへん、鼻はこのぐらいと描いていく。非常にリアルだと感じるように描いたら良しとする。こういう教育をずっと受けてきますと、いまおっしゃったような、大きければ大きいほどいいという描き方のモノサシがないわけです。しかし、生物学ではそういうモノサシがあるんだということであれば。

#### マンガ・・・「うそ」の魅力

養老 それは感受性の問題です。人間の感受性は現実を明らかに超えているわけです。知覚系は誇張する性格を持っていますが、どこまで誇張が許されるかは感受性の問題であって、現実の問題とは別です。

この間科学者と議論しましてね。その方が、おもしろい話をした後に「これはあくまでも仮説ですけどね」と言われたんですよ。僕はその瞬間に、考えないで口が動いたのですが、「あんた、まだ仮説じゃないものが世の中にあると思っているんですねえ」と言ったんです。それをよく考えていただきたい。

この世の現実はたった一つだけと、皆さんはどこかでそう思っていないですか。交通事故が起こったとすると、誰がどういうスピードで飛ばしてきて、どこでどうやって人を引っかけて、どんなふうに乗ったか、という事実は一つしかないと思っておられるでしょう。しかし、その状況の全部を完全に知っている人がどこにいるかというのが、私の質問なんです。

すべてのディテールを含めて完全に知っている人は、1人もいないんです。はね飛ばされた人は、はね飛ばされる瞬間に何を考えていたか。車はどのぐらいのスピードで走って

いたか。いまさら確かめようがないことは山ほどあります。一神教の世界では、それを知っているのが神様です。真実が一つしかないというのは神の領域であって、人間の領域ではないんです。それが信仰です。

真相はこうだと言われると、僕は必ず眉に唾をつけます。人間にはすべてのことはわからないと、わかっているからです。NHKに行くと報道の人が、公正・客観・中立というから、「お前、嘘つけ」と言うわけです。この間、ダイアナさんの事件の報道をやっていました。僕はあの事故を初めから殺人事件だと思っていますけれど、世界のメディアはあからさまにはそう言わないでしょう。あたかもそうであるかな、というようなことをチラッと出すだけです。皆さんはどれだけそういうものを信用していますか。新聞の書いていること、週刊誌の書いていること、テレビがやっていることで、ちゃんとしていると言われるものほど、たぶんどこかで嘘をついているだろうと、多少考える人ならそう思うでしょう。

それでは何が信用がおけるのか。初めから嘘とわかっているものは、このくらい確かなことはないのです。アニメは嘘で、マンガは嘘で、ファンタジーは嘘に決まっている。そのなかでチラッとでも真実に見えるものがあつたら、はるかに信用がおけるんですよ。なぜ「ハリーポッター」があんなに売れるのか。アニメの「千と千尋の物語」にあれだけ客が入るのはどうしてか。それらはおとぎ話でしょう。作りものでしょう。要するに、いまの人が望んでいるのは、それなんですね。おとぎ話もアニメも端から嘘ではないですか。作りものであることがあらかじめわかっている。でも、そのなかで語られる真実が一番人の心を打つんです。

ですから、マンガをばかにするのはおかしい。マンガというものは、むしろある意味で真実を強く伝えるから、逆に怖いんですよ。ただ、ある意味でありがたいことに、マンガだからとばかにする人がいるから、いまは楽なんです。マンガに描いてあるから本当だと言い出されたら、これは大変です。

牧野 いや、その状況が戦争時期にはありました。私の先生は近藤日出造という政治マンガ家です。風刺マンガというのは、戦争時には紙爆弾となるわけです。相手の大統領を鬼畜のように描く。それが上手であれば上手であるほど、小さな子は「あれは鬼だ」「悪魔だ」と信ずることができるわけですね。そういう能力というのもまたマンガが持っている。糾弾された。当時は何も近藤日出造だけではなくて、一般の洋画、日本画の先生方も従軍記者として前線に赴いて、爆撃や相手の戦艦が爆沈するような絵を描いたんです。でも、「近藤日出造、お前が悪い」となるのです。それはつまり、相手の大統領は鬼だと描いたのが真実に見えてしまう怖さです。

そうなりますと、ばかにされ続けたほうがいいかもしれませんが、そういうことも含めて、マンガの学科や教科をつくるときに、受け入れる人がもう一つ上からユーモアでくんでくれればいいのですね。マンガという表現はこんなものなんだということが理解されていけば非常に幸せな状況が続くわけです。

養老 さらに言えば、私は技術・表現というのは、嘘から出たまことだと思えます。絵も写真もテレビも、現実でないことは皆わかっています。それをいまバーチャル・リアリティなどと高級そうな言葉で言いますが、そうではなく、すべてのリアリティはバーチャルなんです。なぜなら、それを本当だと思っているのは皆さん方の脳であって、ほかの人がどう思っているかはわからないのですから。私の脳がそれをリアルだと思っているのであって、それならば一番確実なのは端から嘘だという約束事の上でつくられたものです。そこには嘘がないんですから。いまの世の中はそこが逆説の状況になっているんです。

牧野 嘘から出たまことといえば、田中角栄さんの似顔絵ですね。各紙の政治マンガ家が描いていくうちに、タラコ唇に、ちょびひげがあるだけで、角栄さんだということに

なってしまう。そういう認識が皆にできてしまうんですね。実際の角栄さんの写真を見ると、そんなに唇は厚くないです。普通の人よりちょっと大きいかなという感じですが、写真のほうが嘘で、似顔絵のほうがまことになるんです。なぜかという、あのダミ声はその唇からしか出てこないという印象が、何百万の読者の皆さんに共通認識として受け止められるからです。そうすると、角栄さんはほかの描き方をするとだめ。ちょびひげも、本人が剃ってしまっても、描かないと角栄さんではないんですね。

恐ろしいことに、それが娘さんの田中真紀子さんにまでつながっていて、似顔絵の唇が厚くなってしまう。イメージも遺伝するということでしょうか。そのくらい、植えつけられた認識というのは、なかなか変わらないものなのです。

まさに、あらゆるつくりものが嘘から出たまことで、嘘を連ねている間に、そのなかから何か本当にキラリと光る真実が。歌舞伎でもそういうのがありますね。

養老 演劇も芝居（人をだますための作りごと）というぐらいですから、典型的な嘘なんですよ。だから、逆に人に訴えるわけですね。

牧野 そのなかに真実を感じるわけですね。

養老 顔の話になったので、あと一つ話題を申し上げます。コンピュータでいろいろな画像を合成することができるようになってきて、多くの人の顔を重ねて合成した顔を作ることができるようになりました。当然、平均顔というのができる。その平均顔が必ず、美男美女なんです。すごく不思議でしょう。平均ということは十人並みで、別に美人じゃないはずですが、実際に顔を全部重ねてつくった写真はひとりでに整った顔、すなわち美男美女になるんです。その理由を私は聞いたことがないんですが、どこか矛盾していますね。美男美女は、実は平均顔なんです。皆さんは稀な顔だと思っているわけです。

これは、いまの田中角栄さんの似顔絵と何か関係があると思うのですが、要するにタラコ唇のような特徴がとらえられない顔が美男美女なんです。我々は見ている相手の顔が平均に近づけば近づくほど、左右対称になればなるほど、感受性が敏感になっていきます。対象が少しでも崩れていると大きく減点する。平均的な端正な顔から対称性が多少崩れた瞬間から、点数を引くことになる。そういうふうに感受性のほうが高くなって、平均に近くなればなるほど細かく弁別する。

そういうことは動物でわかってきています。ツバメは、ご存じのように尻尾がピンと2つに分かれています。あの尻尾は長ければ長いほどメスにもてるんです。ただ、長くなると、左右不ぞろいになるんですね。そうするともてなくなる。いくら長くても、左右不ぞろいだとだめなんです。長くて左右対称なほどもてる。それは、その鳥を見ている鳥の脳の感受性の問題です。スーパーノーマルの話もそうですが、どうも我々はあるところで極端な形で感受性が高くなっているらしいと想定しないと、平均顔が美人顔だという話はわからないですね。

牧野 美人画を描く絵描きさんがいて、その方が描くと誰もが「美人だね」と言うとなると、その方はおそらく頭のなかでたくさんの女性像を重ねあわせて、合成して一つの最終的な顔を抽出しているのかもしれないね。

養老 世間ではマンガを描くことが中心に見えるかもしれませんが、それと同等に置かなければいけないのは読むほう、つまり感じるほうの能力です。受け取り側の問題と描き手の表現の問題とは必ず対になっています。

美男美女は、完全に受け取り側の問題であって、顔のつくりの問題ではない。ですから、たで食う虫も好き好きです。人間の感性を変えてやると、とんでもない人が美男美女に見えるというのは十分ありえるわけです。

牧野 最近のアニメとかマンガの若い作家が描く主人公は、あごが極端にとがっています。学生たちが描くマンガの主人公の絵は、頬をそぎ落としたように逆三角形です。彼らには、それでないとか格好良くないという認識があるんですね。

さて、ここでちょっとお休みをいただきます。

## 【休憩】

マンガ・・・誇張的真實

牧野 それでは後半を始めましょう。一昨日でしたか、NHKのETV特集で、昆虫採集をしている養老先生を拝見しました。先生が、ヒゲボソゾウムシを選ばれた理由は何かあるのですか。

養老 いや、それは女房を選んだりするのと同じ理由ですよ。そんなものをきちんと説明しろと言われても。

牧野 ヒゲボソゾウムシと一緒にしてよろしいのでしょうか。

養老 人気があるのは、クワガタ、カブトムシ、カミキリムシの順で、その次は人数が大きく減ってしまって、一般論が成り立たないんです。

牧野 あの番組で、なぜこういうことをやるんだという問いを先読みして、「何がわかるかわからないからいいんだ」とおっしゃっていました。その後で「とはいえ、きれいなんだよね」とつぶやいておられました。

虫のデザインも深海魚のデザインも非常に不思議です。我々がどんなに想像をたくましくしてマンガに描いても、自然にないデザインはないですね。私は、神様のデザインに負けないためには、駄洒落を絵にするしかないと思ひまして、富山県福光町に虫送り七夕というのがあるんですが、そこで子どもたちから虫を収集しているんですよ。シンゴウムシとか、ベンキョウチュウとか、ゴミのリサイクルで駄洒落を形にするんです。まったく昆虫学とは離れていますが、子どもたちは虫の形につくってくるんですね。手塚治虫さんはオサムシを、養老先生はヒゲボソゾウムシを収集されて、もう2万頭になるそうです。

虫の種類も本当にたくさんあるのですが、日本のマンガのキャラクターもちょっと特異かなと思います。私はいまマンガ協会の理事長でもある、やなせたかしさんの「アンパンマン」に着目していますが、描いているご本人が何種類かわからないというくらい、たくさんキャラクターがあるんですね。最初にアンパンマンをつくったときは、サンリオから「アンパンが空を飛ぶというのはどういうものでしょうか」と言われたそうです。スーパーマンや鉄腕アトムなどとあまりにも違いすぎるからです。

やなせさん自身は、子どもたちにも描きやすいという形から入ったのですが、正義を行えば自分が傷つくというキャラクター設定の理念がありまして、困った人を助けるために自分の頭を食べさせてしまうものですから、頭がなくなっていくのです。そういう人間でもない、動物でもない、言ってみれば物ですが、食品に目鼻をつけて、マントを着せて、空を飛ばせて、人助けをする。続いてメロンパンマン、ショクパンマンとできて、そのうちにパンばかりでは困るというお米業界に呼んでオムスビマンをつくり、あらゆる食品がどんどんキャラクター化されていくのです。

そこから飛躍するようですが、日本には八百万の神々がいます。あらゆる所に神様がいらっしゃる。私が幼いころには、田舎のおばあちゃんがかわらけという素焼きのお皿にお米でつくったお餅を乗せて、「これは裏の川の神様」「これは奥戸の神様」「これは井戸の神

様」とお供えをして、それぞれの神様を拝むんです。2階のお蚕様も神様ですから、ちゃんとお祭するんですね。そういうあらゆる所に神様がいて怪しまないことと、マンガ家たちがどんどんキャラクターをつくってしまう感性とは、ひょっとしたら無関係ではないのかなと思ったりするのです。

古くは、絵巻物の百鬼夜行。捨てられた物たちが怨念を持って京の大路を練り歩く図が描いてあるのですが、その物にも何か人間臭さみたいなものを感じているという感性。これまでも独自だと言っているのかどうか。

養老　むしろ一神教の文化がちょっと違うのではないのでしょうか。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の人たちは、神様は1人だという。そして、人間の世界とそうでない世界をはっきり区切ります。ヒツジのドリーが話題になったときに、当時アメリカ大統領だったクリントンは即座に、人間に应用することを禁止すると言いました。人間と動物の間をきれいに切っています。人間と動物の間をきれいに切るのは日本でも普通になってきていますが、本来日本人はそういう感覚をあまり持っていないくて、ずっと生き物とつながっていたわけですよ。

僕は、キリスト教系の学校で教育を受けました。人は神様が特別につくったと。人は動物と違って、神様が特別に魂をつくって入れたというんです。人間と動物はどこが違うかという、人間というのは理性と自由意思と良心を持つもの、と定義されていました。人間と動物をはっきり区別する社会では、人間以外のものは人間のためにあると考えます。

アフリカのマサイ族は、ウシの遊牧をやっています。ウシの群れを山へ連れて行ってエサを食べさせて帰ってくる。皆さんはウシを何に使っているとお考えですか。実は何も使っていません。ウシが価値の基準になっているんです。ウシをたくさん持っている人が偉い人。金持ちはウシ持ちです。ですから、飢饉になってもできるだけウシは食べないんですよ。ウシを食べるのは、まさに財産を食いつぶすことになりますから。マサイ族以外の人は、マサイ族はウシは神様が自分たちの部族のためにつくったものだと思っているから、自分のウシがなくなるとよその部族から盗ってくる、と言います。

牧野　日本人は物にこだわって、それこそ筆供養もしますし、針供養もするし、カツラの供養もする。高野山には白アリの供養塔というのがありまして、殺虫剤の会社がちゃんと供養するんですね。日本人には、物や人間以外の生き物に対する感性があるんですね。

ちょっと飛躍するかもしれませんが、E T V特集の冒頭で先生が胎児の標本を出してこられたのは非常に印象的でした。先生としては一つの目的を持って出されたのですが、見ていて大変ショックだった。プラスチックで固めてある、ごく普通の胎児で、背骨と神経系が全部露出しています。もう一つ、無能症の赤ちゃんの標本もありました。あれは、人間であるけれども、プラスチックの物でもあったような気がするのですが、不思議な存在ですね。先生は「不思議と思うのがおかしいんだ」、「君たちは死体というものからあまりにも離れたために感性がおかしくなっているんだ」というお話をなさったわけですが。

あれを見て、何かが変わってしまうということはないですか。

養老　私はよく申し上げるのですが、人間というのは「私は私、同じ私」と思っているものですから、自分が変わっても、たいいてい人は気がつかない。典型的なのは政治家で、当選する前はただの人ですが、当選すると金バッチがついて偉い先生になる。当選する前には当選しようと思って一生懸命ものを言うし、当選した後も誠心誠意ものを言う。本人は自分は同じだと思っていますが、でも言っていることが違うんです。私が育ってくる過程で、あるときから政治家は嘘つきという常識がついてきたような気がします。要するに、世間一般が政治家は嘘つきと言うようになったのですが、嘘つきなのではなくて、一種の誤解なんです。つまり、皆さん方もまた、自分は自分で、根本的なところは変わる

はずがないと思ひ込む世の中になっただけです。

そう言っても自分の根本的なものは変わらないと、おそらく皆さん方はいま思っておられるでしょう。では伺いますが、皆さん方の根本的なものって何ですか。ご自分のどこが変わらないんですか。アルバムを見ればすぐわかりますが、これでも私は生まれたときは赤ん坊だったんです。その赤ん坊と65過ぎた白髪のじじいとどこが同じですか。

客観的な科学としていうなら、去年の9月9日に皆さん方の体をつくっていた物質で、今年の9月9日まで残っているものは何%あると思いますか。半分以上は入れ替わっていますよ。客観的に同じ人間であることを説明してみてください。この「私は私」というのが、現代人の一番大きな錯覚なんです。

なぜそう錯覚するのか。目が覚めるたびに「私」が戻ってきますでしょう。それを意識というんですが、目を覚ました瞬間に「私は誰でしょう」と思う人はいないでしょう。目を覚ました瞬間に「なぜ俺はここに寝ているんだ」と思う人は多いですよ。そう思えるということは、「私は私」だということがわかっているんです。

いわゆる西洋近代というのは、「私は私、同じ私」と思うようになったことなんです。それを個人というわけです。個人というものが実在しているとすれば、それは「変わらない私」になります。19世紀後半の西洋で、カフカという小説家が「変身」という小説を書いた。グレゴール・ザムザは、目が覚めると自分の体が虫になっていたけれど、「私はグレゴール・ザムザだ」と思っているんです。姿はきのうとまったく変わっているのに、意識はそう言うんですよ。あれは当時の西洋の人間解釈そのものじゃないですか。それをカフカは、まさにマンガ化して描いたわけです。それから1世紀以上経って見ると、現代人はカフカがマンガとして描いた人間そのものですよ。

牧野　いま「マンガ」という言葉で表現されたのは、つまり、理屈ではなくて感性で書いたという意味でお使いになりましたか。

養老　誇張的真相ですね。

牧野　デフォルメのことですね。田中角栄さんの似顔絵もデフォルメでした。デフォルメというのは、視覚的な事実からいうと歪曲、湾曲ですが、感性的には正しいものです。目の小さい人の目を点のように描いたり、ちょっと大きいと非常に大きく描いたりして、その人に似せようとする。そういう意味でマンガ的と。

E T V特集で次に印象的だったのは、九相詩絵巻です。美しい女性が亡くなって、朽ち果て、動物に食べられて、最後は骨になるという絵巻ですが、養老先生は、その最後の骨の絵が解剖学的に正しい、あの時代（鎌倉時代）にこれほどに精密に描かれたものは世界中に類例を見ない、と言われました。ミケランジェロは、死体解剖をして筋肉、骨格などを観察して「最後の審判」に生かしましたが、その有名な解剖絵図より250年も前に、非常にリアルな描写が日本にあった。ああいうものを描いて残してあるのは、珍しいんですか。

養老　残っていたのは偶然だと思いますが、それは当時たくさん描かれたからだと思います。私が本当に驚くのは、そういった感性を持った人たちが日本人だったということです。当時、美術でいえば運慶・湛慶の彫刻が出てきます。あの仁王様は、ギリシャ彫刻に似て、非常にリアルな人体の彫刻です。そういうものは、その後の日本にはないのです。だから、美術史の人は突然変異なんて言いますが、そうではなくて、人というものをああいう目で見た時代の人たちなんですね。番組では同時代の典型的な人を挙げるというから、日蓮であり、道元であり、親鸞でしようとして申し上げたんです。鎌倉仏教をつくり出した人たちは、まさにその時代の人なんです。それも日本人です。

先ほど、胎児の例を出されたのですが、同じ死体でも胎児は日本人にとって別なんです。

クリントンが最初に当選したとき、州によって法律が違っていたのを統一して、連邦として人工妊娠中絶を自由化したんです。日本は、とうの昔にそんなことは自由化しているんです。アメリカでは脳死後の臓器移植が平気で行われて、日本では脳死判定にうるさいのと、ちょうどひっくり返っているからおもしろい。

日本人は胎児を人間だとは思っていないわけです。でも、母親の一部とは思っています。ですから、胎児の処分は親の一存だと、皆さんもどこかで思っておられるでしょう。そう思ってもやはり人間ですから、どこか引っかかります。それが水子地蔵になるわけです。僕はそこに日本人のある種の感性を見るわけです。それは人間というものの定義にかかかっていて、我々は世間に属した段階から人と認めるから、胎児は人ではありません。生まれてきて初めて人になる。そのぎりぎりのところで行われる選別が間引きですね。

ところが、あのぐらいの胎児になると、どうしても人に見えますでしょう。社会の常識では胎児は人でないから人工妊娠中絶は倫理問題ではないと言いながら、他方でああいう胎児を見てしまうとその感性が裏切られてしまう。ですから見たがらないんです。

死体の標本の展示をやったとき、大人の体の一部を展示することまでは何とか許されるのですが、胎児を展示しようとした瞬間から、展示の手伝いをしているアルバイトの人たちが、もうやめると言うんです。日本ではとにかく、ないことにしているのだから出すな、ということでしょう。私は「胎児を見るなど言ったら、あるものはしょうがないでしょう」と言うんです。死体もまったく同じです。皆さんも、胎児の段階を通過して大人になって、やがては死体になるのです。胎児であれ死体であれ、自分自身なんですよ。

自分自身を素直に見ることができない人たちが、いわゆる文明人なんです。だから「そんなものは見るものじゃない」とか「見ると感性が変わる」とか言うのです。でも、そういうものを見ないことによってできあがっている感性は本当か、と私は言っているわけです。明らかに自分が通ってきたもので、そして自分がいずれなるものを見もしない人たちは、信用しません。そういう人は、自分自身が本質的に持っているものをいやだと言っているわけですから、自分で自分を受け入れられていないのです。それは嘘の世界でしょう。

牧野 昔のマンガやSFの宇宙人はタコ型でしたが、最近の映画に出てくる宇宙人は胎児型なんですね。眩い光の中から胎児型の宇宙人が現れると、ショックというか、感銘というか、ある種の心の動きが起こることを映画制作者はちゃんとわかっているわけですね。マンガのなかでも胎児型のキャラクターが幅を利かせています。

赤ちゃんは確かにかわいいのですが、なぜかわいいのでしょうか。

養老 イヌの子でもネコの子でも、やはり頭が大きくて、全体に丸っこくて目が大きく見える。動物の子どもがそういう形をとるのは、哺乳類共通の性質です。哺乳類の親が、あるいはメンバーが「かわいい」と評価する性質なんですね。

子どもが好きなものもまったく同じです。まだ物心つかない子どもに紙に描いた図形を見せ、どの図形を長い時間見ているかを客観的に調べると、大きな丸を2つ描いて真ん中に三角をつけた図形をほかよりもずっと長く見ている。人の顔に対する感受性は、ほとんど何もわからない時代からちゃんと持っているということです。子どもが好むキャラクターのなかにフクロウが入っているのは、おそらく同じ図形だからです。

牧野 赤ちゃんのような、目が大きくて、頭が大きくて、丸っこくて、さらにおぼつかない動きとか、そういったものの総体がかわいらしいと受け取られるのだとすると、世界中で受けているキャラクターのかなりの部分が幼児型であるといえますね。

手塚さんがアトムをつくったときに、やはり幼児型の体型を与えたのですが、その性格とか考えていることはまったく大人ですよ。ロボット権、人間との共生なんていうことまで考えるわけです。それを見ていた少年たちが、長じて工学博士になったわけです。ホンダの二足歩行ロボットのアシモができたとき、プレスリリース用の資料こういう話が書



いてありました。上司が技術者に「きみ、アトムをつくれよ」と言ったら、技術者は「アトムですね」と答えて、会話が通じたということです。その技術者の皆さんは、アトムの影響を受けたとはっきりおっしゃいますね。

いまや次世代の基幹産業だと言われようなロボットがあります。多くの大学でロボットを研究しています。それらを総合すると、空は飛べないにしても、かなりアトムに近いものができるというのですが。

養老     ロボット研究を私は非常に評価しているんです。どうしてかということ、従来の科学研究とさかさまな面を持っているからです。どこがさかさまかということ、動かないものを組み立てて動くものをつくっている。考えてみてください。生物学とか医学では、論文を書かなければ絶対偉くなれないんですよ。でも、論文を100万集めても生き物にはならないんです。論文とは止まったもので、生き物を上手に止める仕事で、ここ150年偉い人のすることだったんです。

ロボットを一生懸命つくっている学者がいたとすると、その人は論文を書いている暇があったらロボットを改良しているでしょう。それはある種の創作活動ですから、絵描きさんとか彫刻家とかに似ているんです。その面での学問は評価されてこなかったんです。まず第一にそういう意味です。

それでは、部品を組み立てていけば生き物ができるかといえば、できません。複雑さが根本的に違うんです。皆さんは12兆の細胞からできた、ものすごいややこしいものです。それを非常に乱暴にまねしているのがロボットですね。いってみれば人間のマンガなんです。しかし、それですら大変な進歩に見えるぐらいに、人間のまねをして動くものをつくるのはむずかしかったです。

ところが、ロボットをつくっていくと、ある意味で人間が良く見えてきます。二足歩行を人間がどういうふうに行っているかということは、ロボットをつくる過程で細かくわかってきたんです。我々は考えなくても二足歩行ができるんですから、理屈がどうかなんてことは一切説明する必要がないですね。歩く原理がわかってきて、やっと人間らしく歩けるロボットがつかれるようになった。我々が全然考えもせずに当たり前に行っていることを機械にやらせることはものすごく大変です。大変な開発費もかかる。生き物をつくるのは、それ以上に大変なことです。

ちょっと話が飛びますが、なぜ人を殺しちゃいけないのか。時計はばらしたって組み立てられますが、人間はばらしたらだめなんです。とてもつくれるようなものではない。そのとてもつけれない人間を殺してしまうのはきわめて簡単です。出刃包丁かナイフ1丁あればいい。僕らでしたらメス1本あればいいんです。メスなどという簡単なものに、人間という複雑なものを壊す権利はない、というのが私の意見なんです。人間のややこしさに比べたら、原爆なんておもちゃみたいに簡単ですよ。そういう簡単なものに、ややこしいものを壊す権利はないんです。実際にロボットをつくると、そういうことがよくわかってくるんですね。

牧野     ロボットをつくっている方が、蚊が殺せなくなったといいます。もしも蚊をつくるとしたら、あんな小さな所にセンサーを入れ、モーターを入れ、しかもそれを飛ばして天井にパッと止まらせるなんてとんでもないことだ。蚊がだんだん尊く見えてくる、というようなことをおっしゃっていました。

手塚さんが、少年が事故で亡くなった変わり身としてロボットをつくった。それは非常に人間的であったわけです。そういうマンガをヒットさせたことがいまの日本のロボット産業のきっかけの一つになっているとしたら、マンガの持っている力はすばらしいものだ、ということを感じたのです。

養老 僕は小学校2年で終戦でした。戦後の日本は、基本的には技術立国といって、一生懸命に車をはじめいろいろなものをつくってきた。その理由は何だったのかとお考えになったことはありますか。戦後になって、社会の価値観が全部ひっくり返りました。僕もそうですが、若い人はまずだまされたと思いました。大人は戦争に勝つと言っていたのが、突然負けたと聞かされるのですから。これは信用おけないなち思うわけですよ。じゃあ信用のおけるものは何か。戦後、連合国の物量に負けたという言葉がありましたが、社会構造がガラガラ変わるなかで変わらないものは、まさに物量ですよ。技術、物なんですよ。ちゃんと走る車はどこでもちゃんと走るんです。国破れて機械あり、ではなかったかと僕は思う。

ですから、海軍の技術将校がずいぶんそういった分野へ入っていきましたよ。ソニーとかホンダとか松下とか。NHKのプロジェクトXでやっていますが、なぜああいうことを一生懸命やったんだと若い方は疑問に思うかもしれません。それはこの世に確実なものがあるとしたら、むしろこういうものだという気持ちが暗黙のうちにあったんですよ。

僕は手塚さんの気持ちのなかにも同じものがあつたのではないかと思うんですね。ですから鉄腕アトムになるんですよ。人間じゃなくて機械になっている。先ほど嘘から出たまことと言いましたが、これも同じで、機械のほうが信用できるんですね。しょせん機械がもしもできませんが、機械がやることは戦争に勝とうが負けようが同じで、変わらない。だから、戦後のものづくりは、かなりバイアスがかかっていた。戦争の裏返しとしての技術発展であったので、やがてだめになります。ものづくりそのものに関心があったのではなく、ある意味では動機不純ですからね。

その後の世代は、そういうことはないでしょう。これから先日本が技術をつくっていく。次世代がロボットをつくっていく。それがロボットづくりを鼻負しているもう一つの理由です。

牧野 手塚さんの後輩である私どもの学生たちは、やはりロボットを描くけれど、もうすでにそのロボットは機械ではないんです。ほとんど人間です。触れば体温があり、やわらかくて、美しく、健康的で、疲れを知らない、まさにスーパーマンです。そういうものが突然自分の生活に入り込んできたときに自分はどうかというシミュレーションをマンガのなかでやります。日本の法律はどうなっているか。遺産相続はどうするのか。結婚は許されるのか。そういうことまで非常に大まじめにシミュレーションする。

ある学生の場合は、もう物ですらないんです。バーチャルです。ある日、お父さんが小さな子を連れてくるのですが、それはバーチャル人間なんですね。問題は、バーチャルなのに触覚があるんです。しかも、バーチャルですから、すぐその女性の理想像に変身できるんです。こういう背丈の、こういう顔つきの、こういう男性がいい、と彼女が思うと、バーチャル少年はたちまち少女の思惑を察して変身する。そういう恋人ができてしまったらどうするか。自分は非常に不完全な存在なのに、自分の理想像がどんどんできて、しかも恋人として自分に尽くしてくれる。マンガのなかでも、彼女に「ここまで理想的だと困るわ」「こんなのはやりきれない」と言わせているんですよ。そういう想定シミュレーションを始めているんです。

京都精華大学ではマンガを教えています。マンガの技術も教えるけれど、実際は学生たちは相当に描ける能力を持って入ってきます。そういう学生たちが皆、スター的な作家になるのかといえ、なるのは本当に一握りでしょう。では、ほかの学生は具体的にどんなことをしていくのかという話です。

竹宮恵子教授に京都府立医大の外科の先生から、手術現場のマンガを描いてほしいという注文がありました。例えば、肝臓の手術場面をリアルに、メスの持ち方、メスの入れ方、看護師さんが医者にメスを渡すときはどういう動作でするのか、ということまで含めて正確に描く。さらに、その後のリハビリ、手術後にどんな問題が生ずるか、本当に治るのか、治らない場合があるのか、もし亡くなってしまったときにどういう対応をするのか、とい

うようなことを、いろいろ想定しながら作品にする。そうすると事前に手術の説明をするときに、お医者さんと看護師さんと患者さんとその家族が、マンガを見てこれからする手術について共有することができる。これは医療現場での医療ミスが起こりにくくなるかもしれないですね。

こういうマンガを描くには、医療、手術の知識が必要です。メスの形、医療器具の知識も必要。前後にどういう医療問題が生ずるか、法律問題が生ずるかといった知識も必要。そうすると、非常に高い知識と表現技術を持たなければならない。しかも、看護師さんは美人であってほしいとか、少女マンガのスタイルにしてほしいとかいう注文もつく。もしそれが成功すると、お仕事としては病気の数だけある。手術の数だけそういうマンガ家の仕事があるということになるわけですね。

そうすると、専門知識と専門的な絵画技術の双方持ちあわせた人をつくらなければなりませんから、これは精華大学1校では足りないということになります。よく、そんなにマンガ家を育ててどうするんですか、皆失業しちゃうじゃないですか、と言われると、そういう説明をしているわけです。

養老 解剖というのは非常に図をたくさん使うんですよ。解剖の本はマンガの本ですよ。写真で解剖図をつくった本もありますが、つくっている人はえらく苦労しています。どうして写真ではいけないかというと、写真には余計な情報がたくさん入っているからです。情報は、簡潔に要を得て伝えなければいけないものであって、写真は解剖ではあまり役に立たない。人間の顔だったら写真に撮ったほうが確実です。ところが、中身は、神経は出ているわ、結合組織はバラバラ、血管はいろいろと、写真で見たら解剖している本人である私でも何が何だかわからなくなってしまう。ところが、これを絵にしたらよくわかります。

解剖の絵を描くのは、世界各国そうなのですが、昔からプロがいるんです。日本ですと芸大などの絵描きさんですが、これは問題があるんです。マンガと絵は違うから。絵を描く人はどうしたって絵画の技術が高級だと思っているんです。ところが、解剖の絵を誰も芸術だとは思っていないでしょう。だから、絵描きさんを雇うと、どうしても副業になってしまう。しかし、解剖は絵がないとどうにもならない学問なんです。そういう分野がほかにもたくさんあるはずですよ。アメリカでは医学イラストレーターが専門職として成り立っていますが、僕は日本だったらそれはマンガ学科の卒業生でいいはずだと思っています。

ところで、日本の大学の学科分類の最大の欠点は、対象で学科を切ることです。法律を扱う学問と経済を扱う学問とは違うというんですよ。でも、違わないでしょう。料理を習うときに、和食、中華、フランス料理というように分けて、皆さん納得している。僕はそういうふうには分けない。包丁の使い方、材料の選び方というように、方法で分けます。包丁の使い方をちゃんと心得れば、中華だろうが和食だろうが使えるでしょう。それをやらないから日本の学校は役に立たないんです。ですから、法律について一応知ったような顔をしているけれど、応用はまったくきかないんです。

解剖というと、皆さんは人間をばらしているんだ、人間について何か知るんだと思っているでしょうが、僕はまったくそう思っていないんです。解剖の方法論は何にでも使える。よく比喩的に使うじゃないですか、社会を解剖するとか。僕はあちこちに余計な口を出すようですが、根本は解剖で覚えた方法論を使っているだけです。まさにメスの使い方です。

マンガは表現法なんですよ。しかも、非常に日本的な表現方法を含んでいるわけです。これが役に立たないわけがないでしょう。どこに行ったら使えます。

去年コスタリカへ行きました。国が昆虫の研究所をつくっているんですが、そこに絵描きさんがアルバイトを含めて3人もいて、きれいな虫の絵を描いています。あれもマンガですね。皆さんは相当な偏見を持っていると思うのですが、それこそピカソの絵だって見ようによってはマンガですし、パソコンで使っているアイコンからデザインと呼んでいるものまで全部含まれているわけです。そういった表現は非常に重要です。

最近私の本が売れているのですが、中身は私が何十年言ってきたことと別に変わりはないんです。なぜ売れたかと反省すると、まず第一にこれは私が書いたのではないんです。私がしゃべったことを若い人が書いてくれたんです。新潮社のフォーカスという写真週刊誌がつぶれて、その一部の人間が新書を出す部署に放り込まれたのですが、私をホテルに監禁しまして警察の取り調べみたいにいるいろいろ聞き出しまして、それを書いたんです。あの週刊誌の文体、記事の整理の仕方、文章の書き方が一般受けしないはずがない。なんと私自身が書いた本よりはるかに売れたわけです。それは当たり前で、そういう文章じゃなければ読めない人がほとんどになっているんですから。

もう一つ、いま表現としての書き言葉が非常に変化していると思います。一億皆書くようになりましてから。携帯文化・メール文化ですよ。鉛筆も動かさないという人が、携帯やメールなら文章を書くんです。それは書き言葉だけれど、話し言葉が延長したものです。明治に言文一致体ができましたが、もう一度そういう時代が来ていると思います。しかも、今度の言文一致体は明治のときよりもっと口語文に近づいた。それでもやはり、文語文なんです。なぜなら、変なマークを入れたりするからですね。

この間小林秀雄賞の選考をやって、受賞作が二つになりました。一つは吉本隆明先生で、夏目漱石論の講演の記録を集めたものを吉本さんが自分で直している。もう一つは、東大経済学部教授の岩井克人さんの『会社はこれからどうなるのか』です。岩井さんが書いた本はたくさんあるのですが、どれもむずかしいんです。ところが、この本は、女性記者が岩井さんに質問する形でまとめた。偶然、2冊とも語りなんです。いずれも普通に書かせたらむずかしい本になるところを、そういうふうにとまとめたら評価が高くなった。

これは表現の問題でしょう。文章だってそうなので、マンガで広げられる可能性というのは非常に大きいですよ。本当に自分の言っていることを人に伝えたかったら、伝えられるようなメディアに載せなければいけないんです。それが表現ですよ。その表現というものは、必ずしも自分の都合でどうこうなるものではありません。どういう表現が現在通用するかということは、やはり変わっていく。

マンガのように非常の多くの人が大量に読むものは絶対に大事だと思うんです。それ次第で平均の人の質が、がらっと変わってしまう。昔風に言えば、義務教育みたいなものです。ほとんどの人が、この教科書を通るので、それがたとえば手塚治虫だったわけです。

一方、文部科学省はいまだに教科書検定などという時代遅れなことをしている。NHKの統計では、小学生は1日6時間テレビを見ていますが、テレビ番組を文部科学省が検定していますか。1年に何時間読むかわからない教科書を徹底的に検定して、その挙句に外国から文句つけられて、国内で政治的な問題を起こしている。子どもは、テレビを見て、マンガを読み、ゲームをやっているんですよ。子どもが教科書とマンガとどちらを本気で読んでいるか考えてみてください。そうしたら実質的に子どもに与える影響はどちらが大きいかわかるでしょう。

牧野 私どもマンガ描きは、本当に机にしがみついて描いている。ストーリーマンガの人たちは1日十何時間もそれに費やしているわけです。でも、養老先生がおっしゃったような、外からの応援歌はいままでなかったですね。とくに大学にマンガを入れるなんていう場合には。

きょうは、私が想像した何倍もの強力な援護を養老先生から受けたわけですが、そのなかでも解剖図もマンガだということが非常にすばらしかったと思います。おもしろい物語のマンガだけではなくて、解剖図もちゃんと主役、脇役を心得、何を伝えたいか、どの部位がどうなっているかということをきちんと描こうとすると、それは当然マンガの持っている特性、伝達という手法を駆使することになるということですね。非常にわかりやすいですね。しかも、マンガ家自身がマンガのことをこういうふうにも力説しても、なかなか

説得力を持たないのですが、解剖学者がおっしゃってくださると「なるほど」と。きょうは時間がなくて事前の打ち合わせもほとんどありませんでしたが、合致する点がたくさんあったし、かえって十分な打ち合わせをしなくてよかったと感じています。

#### 質疑応答

大槻 多摩大学の大槻といいます。人間の体の物質が1年間で半分以上入れ替わるとおっしゃいましたが、もうちょっと正確な数字を知りたいのですが。

養老 脳は、細胞は入れ替わりませんが、構成する分子は半分程度入れ替わると思えます。一番遅いのはおそらく骨で、半分以上は残っていると思います。でも、骨のなかにある細胞の物質は1年経ったらかなり入れ替わってしまう。骨は生き物ではないですが、それを一方で溶かして、一方で付け加えている。ですからやはり変わっていくんです。人体の7割を占める水は99.9%以上入れ替わっています。小腸の上皮の細胞は、3日で完全に入れ替わってしまう。1年間で120回入れ替わります。顔の表面は、小腸よりは遅いですが、それに近いぐらいに入れ替わっていると思います。

小野 国士舘大学の小野です。マンガの絵が漢字とすると吹き出しがふりがなに当たるとのことですが、欧米のマンガにも吹き出しがありますが、漢字はないです。そうすると読むときの脳の場所が違うのですか。

養老 それは調べてみないとわかりません。

小野 吹き出しのなかの文字の大きさは日本のマンガのほうが大きく、欧米のマンガはアルファベットですから日本のマンガより文字量が多いですね。だから日本のマンガは非常に速く読めるということもあるのでしょうか。

養老 日本のマンガは、画面全体、ページ全体の構成からすべて約束事があり、読者もそれに慣らされています。右上から左下へ読む形で、マンガ自体の構成が日本語読みになっていますね。ですから、ある意味でそれは文化固有のものではないかと。

牧野 きょうはN T Vの方が取材に来られています。事前に、日本人の脳は特殊であり、国語教育のために非常に読み取り能力が高くなり、そういう読者によって日本のマンガは育てられてここまで発達した、という話をしたのです。それを持ってN T Vのなかでプレゼンテーションしたら、アメリカの人たちはそういう脳の訓練をしていないのに、なぜ日本のマンガを受け入れるんだというような質問が出たそうです。

私がそれにこう答えました。とはいえ、日本のように出版文化の4割、5割近くを占めるような現象は起こらないでしょう。欧米で日本のマンガが受けているといっても、ある意味ではそういう脳の働きを持った方たちがいらっしゃるからだろう。日本では小さいころから均等でかなり高度な教育を受けているために、大変広範な読者がいて、その読者がマンガを育ててきた。そして、そういうプロセスはともかくとして、成果物であるマンガはある程度外国でも受け入れられている。アメリカでは、成人マンガなど、大人が読むマンガはなかなか育たない。初めから拒絶されるだろうけれど、日本のような風土だとそういうマンガができる。そのできあがったマンガをアメリカが受け入れることはありうるだろう。そういうことを申し上げました。

(了)